第37回児童生徒読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校1年生の部　最優秀賞

本当の友だち

弟子屈中学校　西郷　綾夏さん

あなたには、沢山の友達がいますか？それとも、少なくても大切な親友がいますか？私には小学校、中学校とほとんどが同じメンバーと一緒に楽しい学校生活を送れる仲間達がいます。その中でも仲の良い友達はクラス替えによってあまり話さなくなってしまったり、別のクラスであまり話さなかった子でも、同じクラスになるとすごく仲が良くなったり、クラスが変わったままでもずっと仲良くできる子もいます。

この本の主人公の恵美は、ある出来事とある言葉によってそれまでの友達を失ってしまいました。ある日の放課後、にわか雨が降り出しました。傘を持って来なかった5人の友達。唯一持って来た恵美の傘に「私も入れて！私も入れて！」とみんなが入って来ましたが、傘からはみ出してぬれてしまうし、歩きづらくて不満な恵美。そんな時、道路の反対側を傘をさして一人で歩いている、同じ学年の由香を見つけました。恵美は由香の傘に入れてもらおうと道路を渡ろうとした時、恵美は車にひかれてしまったのです。そしてお見舞に来てくれた友達に対して恵美は、「あんたらのせいだから！」と何度も責め立て、恵美から友達は離れていきました。事故で左足は不自由になり、ずっと松葉杖無しでは歩けなくなってしまった上に、それまで楽しく笑っていた友達も失いました。全てがつまらなくなりました。道路の反対側を歩いていた、由香は腎臓が悪く、みんなと一緒に運動が出来なかったので、恵美と由香はだんだんと話すようになりました。

私は、ずっと松葉杖になってしまった恵美の事を考えると、元友達に八つ当たりしてしまうのも理解できます。交通事故は、恵美の不注意でもあるので、「あんたたちのせいだから！」と責められて不機嫌になる元友達の気持ちも、理解できなくもありません。でも、私は恵美のけがを考えると、元友達は大ショックできつい事を言ってしまった恵美を、許すべきだったと思います。しかも元友達5人全員が、恵美から離れてしまったことが、納得いきません。それまで仲が良いと思っていた友達であっても、それは本当の友達ではなかったのです。きっと多分、元友達は「恵美が自分で道路にとび出したくせに、私達のせいにするなんて信じられない！」とでも陰口を言ったのではないでしょうか？そして他の4人も「そうだよね。」と、恵美の体とつらい心を思いやる事もせずに、周りの意見に合わせて「敵」になったのです。でもまた、そこで「そんな事言ったら恵美がかわいそうだよ」とでも、反論すれば他の4人に嫌われるかもしれません。

きっと作者は、「友達がたくさんいるからいい！」ではなく、「少なくてもたった一人でも、一生忘れられない友達がいればいい！」というメッセージがこめられていると思います。この本に書かれている友達の物語は、心にしみて、学校生活での友達という人間関係がからみ合っていることがわかりました。それぞれの個が形成中なので、ふとしたことが自分自身や、物語の主人公恵美と同じように影響を受けてしまうのかもしれません。

今、日本では私と同じ位の年れいの子が、いじめを受け自殺してしまうということも少なくはありません。私の通っている中学でも、休み時間を一人きりで過ごしたり、小さないじめも起きていると思います。だからこの物語のように、みんなで「何をしているの？」とか「一緒に遊ぼう」など声をかけるだけで、もっと本当の友達に近づくと思います。

「友達」っていうのは、自分を全て受け入れてくれる存在でもありますが、自分が甘えるためだけにあるのではなく、自分という存在を確認させてくれるものでなくてはならないのだと思います。だから、もう一度人とのかかわり方をしっかり見つめて過ごしていきたいなと思います。

書名『きみの友だち』
重松　清　著

（寸評）文中の「友達とは自分が甘えるためだけにあるのではなく、自分という存在を確認させてくれるものでなくてはならないと思います。」という言葉が印象的でした。「友達」という存在についてあらためて考え、自分の意見をうまくまとめることができていたと思います。

■中学校2年生の部　最優秀賞

挫折と挑戦

川湯中学校　松田　幹哉君

僕はまだ生まれて十四年ですが、僕もすでにたくさんの失敗、挫折といったような経験をしてきました。これは天才であろうと運の良い人であろうとしても必ず一度は経験するものだと僕は考えています。だから、

「仕方がないものなんだ…。」

という思いも同時にありました。

この本を読んで、二度と味わいたくないような挫折を「いかにしないようにするか」ではなく、その挫折を「いかに次の挑戦に継げることができるか」ということを中心に夢や目標に向かっていく大切さというのも知ることができました。

しかし、挫折を利用して次の挑戦の糧にする。そしてさらにその挑戦を成功に変えるというのはものすごく難しいことなのではないかと思います。この本の作者、中竹竜二さんはたくさんの成功を手にしていましたが、その反面、たくさんの失敗もありました。今まで僕は失敗を全然しない人をうらやましがっていましたが、ここで初めてそれは違うのではないかと気付きました。たしかに成功だらけの人生で苦を経験しない方がいいと思います。しかし、失敗が全くない人は、ともに成功も全くありません。そして中竹さんはありえないくらい失敗をして、成功もしていました。つまり、きっかけとなる最初の挫折をまずは受けとめ、次の挑戦への一歩を勇気をもって踏み出さないと成功も失敗も何も始まらないということです。

中竹さんはラグビーをやっていて、何回も連続で大けがをしてその中で七回も手術を受けたそうです。僕もスポーツをやっていて、けがや急に体の調子が悪くなったりして少しの間練習に参加できないことがありました。ですので、当時の中竹さんの気持ちがなんとなく想像できます。中竹さんは他にも、試合での惜敗、受験の失敗、いじめ、差別と、読んでいると僕もつらくなってくるようなたくさんの挫折をしています。しかし、そんな挫折を乗り越える考え方があり、その中でも僕が共感したものがいくつかありました。

「手を抜かず、力を抜く」一見どちらも最初は同じような意味に聞こえました。中竹さんは毎日休むことなくきついトレーニングをしていて、ある日、そのトレーニングのやりすぎで体を壊してしまったことがあったそうです。それと同じ様な経験で、僕も部活の練習中に自分の体力も考えないで頑張りすぎたために体の調子を崩してしまったことがあります。だからそのときの中竹さんの挫折した気持ちが痛いほどよくわかりました。そんな失敗をこの本では厳しく、その努力はただの自己満足にしかすぎない、という風に言っていました。少しドキッとしましたが、確かに自分でも気付かずにそういう風な思いが多少あったのかもしれません。

次に、僕が、初めて自分に自信を持てたきっかけになるものがありました。「お互いのスタイルを理解し合う」結構難しいことだと思います。まずその前に、自分がどんな人間なのかがわからないといけません。僕は今まで、自分の長所を見つけられていませんでした。正しくは、少し感じ始めている自分の長所に自信を持てなくて、短所ばかりを見つけて、そればかりを自分として認めてしまっている状態でした。この本で紹介されている林という選手は運動センスがなく、ミスばかりする選手だったそうです。ここから僕は林さんに大事なことを教えてもらいました。そんな林さんは他のことができないならと、ラグビーのタックルという一つだけの武器を磨き、試合で活躍したそうです。これから別人になるというのは無理です。しかし、しっかりと自分というスタイルに素直になって、それを生かし、同時に相手のことも理解し合えるようになりたいです。

最後に、これこそ僕は一番大切なのではないかと思ったものがあります。それは「挑戦へのストーリーを描く」ということです。中竹さんは、なぜイメージするということが大切なのかということを「人は思い描いた以上のことはできないから」と言っていました。これには今までの自分を重ね合わせても同じことが言え、納得することができました。なので僕は、いつ、どんな状況にあったとしても、常にわくわくするようなストーリーを描き続けたいと思います。

しかし、僕にはまだ挫折を挑戦にうまくこれから変えていけるかどうか、不安はあります。だからこそ、

「もっとたくさん！そしてはでに！」

という思いで、たった一度の人生、楽しんでいきたいと思います。

書名『挫折と挑戦』
中竹　竜二　著

（寸評）読書を通じて感じたことを自分の体験をふまえてわかりやすく描かれています。ラストの言葉からは、「人生を思う存分楽しみたい」という松田君の笑顔あふれる姿が浮かびます。これからもさまざまな困難にぶつかったとき、「挫折」を「挑戦」へと変えられるよう頑張ってください。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。
※生徒の学年は、コンクールが行われた平成23年度当時のものです。